



東日本リーグで早大選手を破った山田高義(文4・名古屋工業)



全日本ジュニアで準優勝し期待が高まる大山博貴



秋元優介主将(政経4・足利工業大学附属)



中出幹児監督



千葉貴律部長



第41回 レスリング部

紫紺の勇者たち *Heroes of the Meiji.*

—明大体育会の系譜—

文・撮影/菊地武顕  
写真提供/明大スポーツ新聞

学生王者の奪回を目指して  
自衛隊への出稽古を繰り返す

「学生王者復活を目指しています」  
就任2年目となる中出幹児監督は、力強くそう語る。団体戦の全国大会は存在しないので、群を抜いてレベルの高い東日本学生リーグ戦での優勝を目指しているのだ。  
現在明治大学は、同リーグ1部16校の中堅に位置している。

「個人競技ですから、インカレの個人戦で優勝したいと思うのは当然です。しかし各階級(全7階級)に各校一人しか出場できない団体戦で、明治の看板を背負って戦うことに誇りを持って欲しい。キャプテンを中心に寝食を共にして切磋琢磨していくうちに絆が強まり、皆で強くなるうという気持ちが高まります。学生のうちはこうしたメンタルの要素も大きく影響し、個人のレベルも上がっていくんです」  
明治のレスリング部には、輝かしい伝統がある。そもそも早稲田大学と共に、我が国のレスリング黎明期を支えたのだ。

日本は1932年(昭和7年)のロサンゼルス五輪に、初めて7名もの選手団を送り込んだ(過去2大会

では各1名の派遣だった。当時はまだ国内に統一された競技団体は存在せず、大日本レスリング協会、講道館、日本アマチュア・レスリング協会の3団体が鼎立。3団体の協議によって、明治の河野芳男を含む7名が選出されたのだ。

なぜ競技団体に講道館が入っていないのか不思議に思われるだろうが、実は当時のレスリング選手はいずれも柔道の有段者ばかり。7選手で合計32段という顔ぶれだった。  
勇んで五輪に臨んだ猛者達だが、ことごとく惨敗。それを受け、34年に国内統一団体が誕生。同年4月には明治にレスリング部が創設され、12月に明早対抗戦が開かれた。

17名が五輪に出場

36年のベルリン五輪には、明治から水谷光壮、吉岡秀市が出場。水谷は6位入賞する快挙を成し遂げた。また同年、明・早・慶応義塾大学・専修大学の4大学によるリーグ戦(現在の東日本学生リーグの礎)が初

めて行なわれ、明治が優勝。38年春からは6連覇を達成するなど、戦前のレスリング界を牽引した。

前述の河野も含め、これまで五輪には17名が出場。メキシコで宗村宗二が、ミュンヘンで柳田英明が金を獲得した。他に、モスクワへの出場ポイコットにより幻の代表に終わった多賀恒夫(現副部長)と宮原章もいる。なお東京五輪に出場した斉藤昌典、杉山恒治は後にプロレス入りし、マサ斎藤、サンダー杉山のリングネームで活躍をした。

出稽古を繰り返し強化

しかし……五輪代表選手は、モスクワ以降、輩出できていない。それほどか平成になってから、部員数が4学年合わせて一桁しかない危機的な時期すらあった。

部員数が安定した今でも学生王者への道は険しいが、中出監督は出稽古を繰り返し強化を図っている。

「レスリングはオリンピックでメダルが期待される種目です。五輪から外されるかという危機感から協会内の結束はより強くなり、出稽古を積極的に行い各大学の選手が強くなることで、日本全体の底上げをしたという雰囲気があります。私が自

衛隊員ということもあり、よく自衛隊への出稽古を行っています。またメンタルの面では、家族の方々に連携を深めていただくよう協力をお願いしています。家族の応援は、選手のモチベーションに大きく影響を与えますので」

まずは六大学で優勝を

中出監督は、秋に行なわれる六大学リーグの制覇に意欲を燃やす。

「小さな規模のリーグ戦ですが、優勝すれば、それを弾みに飛躍できると思っています。ここ数年、早稲田が優勝、明治は2位という成績が続いています。なんとか早稲田を倒して優勝したい」

期待の武器もある。大山博貴(経営3・仙台育英)は昨秋の東日本学生新人戦で優勝、今春行なわれた全日本ジュニアで準優勝した。

「このような選手が一人いると、部全体が活気づきます。レスリング選手のピークは二十代半ばから二十代後半。今の学生達が東京オリンピックに出場する可能性が大きいわけですから、意識を高く持って欲しい。今後は国際的に通用する選手を育成するため、海外遠征なども計画しています」  
(文中敬称略)